デグーの千夜一夜物語

第一夜　アラビアンナイト

1　アラビアの勇気ある女性

シーシャ屋デグーへお越しの皆様、お楽しみいただけているでしょうか？

「デグーの千夜一夜物語」は、ジャンルを問わずにいろいろなお話を載せていきたいと考えています。

ところで、タイトルにもなっているこの「千夜一夜物語」もとい「アラビアンナイト」をご存知でしょうか？

アラビアンナイトはデグーにふさわしく、シーシャ屋（コーヒーハウス）で男たちが話していた物語が集まったものだともいわれています。早速、物語を見てみましょう。

今は昔、兄弟ともども妻に不倫をされ、女を信じられなくなってしまった王様がいました。その王様は女性を嫌うあまりに、どうどう毎日結婚しては、次の日にその女性を殺すようになったのです。そのような残虐非道な行いを続けた結果、いよいよ、王様に嫁ぐ女性が街からいなくなってしまいました。さて、どうしたものかとみなが困っていると、大臣の娘が立候補するというので大騒ぎ。その女性こそがシェヘラザードです。

シェヘラザードは大臣の娘だけあり、美貌も教養も兼ね備えていました。賢い彼女は、一つの策を持っていたのです。それは、毎晩、王様にお話をして、夜明け前にその話を打ちきれば、話が気になって王様は自分を殺さないのではないかという策でした。

以上がアラビアンナイトの大枠です。この大枠の中で千話の物語が話されることになります。

ちなみに、シェヘラザードという名前の意味は「高貴な娘」、「**街を解放する者**」です。彼女は命を懸けて王国の女性たちを救おうとしたのですね。

2　西洋人による「発見」

さて、シェヘラザードが語った話で有名なのは、「シンドバッドの冒険」、「アリババと 40 人の盗賊」、「アラジン」などでしょうか。世界中でも有名な物語ですが、実は、本場の中東では、アラビアンナイトはさほど有名ではありません（最近ようやく注目されはじめたそうです）。中東でもあまり知られていないアラビアンナイトを発見し、その物語を集めたのは 18 世紀のフランス人でした。

彼はただ純粋に、物語を収集し翻訳しただけなのですが、その一世紀後、帝国主義が世界中を席巻した際に、西洋でアラビアンナイトが広まります。イスラム圏のことを知るために、アラビアンナイトを読み込み、敵の事を知ろうとしたのです。

3　本当は怖い「グリム童話」

なぜアラビアンナイトなどを読んで、イスラムのことがわかると考えたのでしょうか？それには当時の西洋人にとって、童話とは何だったのかから話さなければなりません。

あまり知られてはいませんが、18－19 世紀というのは「国民」が生まれた時代でした。それ以前にも国自体はありましたが、自分たちが「ドイツ人」または「フランス人」だ、などという意識は持っていませんでした。あったとしても、せいぜい自分が住む農村に帰属意識があるくらいのものだったと思われます。

ところが、フランス革命を経て、ナポレオンが登場したことにより時代がガラリと変わります。軍事の天才だったナポレオンは、「国民意識」を持った人間を兵士に使い、ヨーロッパ大陸最強の軍隊を作り上げたのです。それ以前の戦争は、傭兵など、お金で雇っていただけの人間だったので、忠誠心や戦争に対する本気度が低かったのですが、愛国心を持った兵士はその気構えからして違かったのです。

愛国心の力をまじまじと見せつけられた各国は、負けじと、国民意識を作ろうとし始めます。その方法の一つに、各地の童話をまとめあげるものがありました。それが有名な「グリム童話（ドイツ)」や「ペローの童話（フランス・「赤ずきんちゃん」「シンデレラ」「眠れる森の美女」)」でした。

各地の民話を国ごとにまとめあげることで、自分たちは一つであるいうことを強調したのですね。

4　アラジンは中国人！？

ところが、イスラムではそれは行われませんでした。なぜならば、**イスラムとはそもそも全く異なる民族でも、同じ神を信じることでまとまろうとした国家（共同体）だからです。**国民意識の形成など必要ではなかったということですね。その意識の差は、アラビアンナイトにも表れています。典型的なのは、「アラジン」です。アラジンと言えば、私たちは中東の衣装をまとったアラジンが魔法の絨毯に乗るイメージですが、中東での「アラジン」の主人公はなんと中国人なのです。さらに、そのアラジンを騙そうとやってきた敵役はアフリカ大陸からやって来た人間です。イスラムの人にとっては、このくらい民族が入り混じることは普通だったのでしょう。

図１　中東版アラジン

5　みんなちがってみんなイイ

この違いは、西洋社会とイスラム社会の大きな差になっていきました。現在、人々は平等で、誰もが個性を持ち、成長できる可能性があるという日本にも普通にある価値観は、西洋のものです。この、「世界に一つだけの花」のような思想は、フランス革命の啓蒙主義によって明確化され、現在でも生き続けています。しかしながら、この思想を生み出した人たちが見ていた人間は「市民」でした。

当時のヨーロッパでは、**多くの農民は城壁の外で暮らし、城壁の中で暮らせる人間は「市民」と呼ばれる上位の人間だったのです。**上位の人間が集まっているのだから、教養や能力が高い人ばかりです。そういう人たちなのだから、「国王や貴族ではなく、自分たちで国を運営した方がいい、いや、出来る！」そう考えても不思議ではありません。しかしながら、本当に誰もが頑張れば高い能力が身につくものなのでしょうか？出来ないのは努力をしてこなかったという自己責任なのでしょうか？

6　みんなちがってみんなダメ

一方で、イスラム世界では、「そもそもみんなダメだよね」という価値観の中で成り立っています。それは神の前ではみな同様にダメだということです。そのため、**社会もダメなことを前提に成り立っています。**

イスラム教は宗教として厳しいイメージがありますが、実は出来なくても全然構わないのです。たとえば、断食。べつに出来なくても誰も責めてきません。それどころか「神様を恨むなよ」とすら言ってきます。儀式に参加できなくて残念でしたねということですね。さらに、喜捨といって、金持ちが貧乏人に「喜んでお金を渡す」という行為がありますが、この時もお金を渡す側が「ありがとう」といいます。それは、貧乏人が喜捨をするチャンスを与えてくれたからです。イスラム教では、能力は神から与えられたもので、能力が高ければ高いほど、現世でなすべき責任が重くなります。逆に言えば、**能力が低ければ低いほど、責任がなく、なにもせずに天国へと行けるのです。**まるっきり西洋の世界とあべこべですね。

人間は誰もが自由で成長をすることを前提にした社会と、誰もがダメだということを前提にした社会。あなたはどちらが良いですか？

おや、そろそろ夜が明けそうです…

文責：　田井　勝